

全学教育科目に係る授業アンケートにおける エクセレント・ティーチャーズ (令和5年度)

高等教育推進機構では平成24年度から、全学教育科目に係る授業アンケート結果において、総合評点の値が上位となった専任教員のうちから次項選定基準に基づき、「全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャー」として選定し、所属・職名・氏名・担当授業科目・総合評点をホームページで公表することとしている。

また、エクセレント・ティーチャーのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容・実効上の取組・工夫等について報告を得て紹介する。

教員から報告された授業への取組・工夫等については、学生へのフィードバックを目的として、また、教員のFDや教員相互の授業参照資料として公表する。

なお、平成23年度まで評価室が実施してきた授業アンケート結果の公表に至る検討の経緯や公表方法に関する考え方等は、平成15年度年次報告書（第1部第2章『学生による「授業アンケート」について』）や同別冊「学生による授業アンケート結果」（PDF）を参照願いたい。

なお、授業アンケートは学生の視点からの評価であり、この指標のみが授業の質や教員の教育能力を示すものではないことを付言しておきたい。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーの選定基準

1. 対象者

対象年度に開講した全学教育科目において、学生による授業アンケートを実施した授業科目を担当する本学の教員（非常勤講師を除く）とする。

ただし、アンケート提出者が9名以下の授業科目を担当する者は除く。

2. 選定方法

学生による授業アンケート結果において、文系・理系区分及び授業科目区分ごとに総合評価の値が上位の者から、原則、別表①の選出数に基づき全学教育科目におけるエクセレント・ティーチャーとして選定する。ただし、総合評点（主要設問の評定値の平均）の値が4.00未満の者は除く。

なお、文系・理系区分は、担当教員の所属部局により別表②の「文系・理系区分」に基づき区分することとし、授業科目区分は、国立大学法人北海道大学全学教育科目規程（平成7年4月1日海大達第2号）第2条に規定する科目により区分することとする。

【別表①：選出数】

		一般教育演習	総合科目	主題別科目	共通科目	外国語科目	外国語演習	基礎科目	日本語科目
文系	15	2	1	4	1	3	3	1	
理系	15	4	1	1	1	2		6	

【別表②：文系・理系区分】

＜文系部局＞

法学研究科	観光学高等研究センター	高等教育推進機構
教育学研究院	アイヌ・先住民研究センター	大学院教育推進機構
メディア・コミュニケーション研究院	社会科学実験研究センター	国際連携機構
経済学研究院	大学文書館	人材育成本部
文学研究院	埋蔵文化財調査センター	安全衛生本部
公共政策学連携研究部	国際連携研究教育局	学生相談総合センター
スラブ・ユーラシア研究センター	産学・地域協働推進機構	

＜理系部局＞

水産科学研究院	獣医学研究院	総合博物館
地球環境科学研究院	情報科学研究院	北方生物圏フィールド科学センター
理学研究院	北海道大学病院	人獣共通感染症リサーチセンター
薬学研究院	低温科学研究所	環境健康科学研究教育センター
農学研究院	電子科学研究所	北極域研究センター
先端生命科学研究院	遺伝子病制御研究所	サステイナビリティ学教育研究センター
保健科学研究院	触媒科学研究所	保健センター
工学研究院	情報基盤センター	創成研究機構
医学研究院	アイソトープ総合センター	数理・データサイエンス教育研究センター
歯学研究院	量子集積エレクトロニクス研究センター	

3. その他

- （1）上記2のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者から、当該授業科目の目的・内容、実行上の取組・工夫等についての報告を得て紹介する。ただし、過去3年間に紹介したエクセレント・ティーチャーは除く。
- （2）一人の教員が複数の授業科目区分で最上位となった場合は、全ての授業科目について報告を得て紹介する。ただし、対象者の希望により、報告・紹介する授業科目をいずれか一つのみとすることができる。
- （3）上記（1）、（2）のただし書きに該当する場合、及び退職等で報告を得られない場合は、次点のエクセレント・ティーチャーから報告を得て紹介する。
- （4）上記2のエクセレント・ティーチャーズのうち、各授業科目区分の最上位者を「ベスト・エクセレント・ティーチャー」とし、高等教育推進機構長より表彰する。

全学教育科目に係る授業アンケートにおけるエクセレント・ティーチャーズ(令和5年度)

区分内 順位	文系 理系	授業科目区分	総合 評点	※所属部局名	※職名	氏名	授業 形態	必修 選択	授業科目名	講義題目名	提出 枚数	備考
★	1	文系 一般教育演習	4.91	高等教育推進機構	准教授	杜 長俊	演習	選択	一般教育演習(7 セッションセミナー)	多文化コミュニケーション講座	14	
	2	文系 一般教育演習	4.75	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	中川 理	演習	選択	一般教育演習(7 セッションセミナー)	経営戦略入門	20	2022ベスト・エクセレント・ティーチャー 2020執筆
	3	理系 一般教育演習	4.75	北方生物圏フィール ド科学センター	准教授	岸田 治	演習	選択	一般教育演習(7 セッションセミナー)	南紀熊野の自然と人々のくらし・初春編	15	
	4	理系 一般教育演習	4.72	医学研究院	教授	神谷 温之	演習	選択	一般教育演習(7 セッションセミナー)	ニューロンから脳へ	16	
	4	理系 一般教育演習	4.72	北方生物圏フィール ド科学センター	准教授	河合 正人	演習	選択	一般教育演習(7 セッションセミナー)	牧場のくらしと自然・冬季編	21	2022ベスト・エクセレント・ティーチャー 2022執筆
	6	理系 一般教育演習	4.71	北方生物圏フィール ド科学センター	教授	中路 達郎	演習	選択	一般教育演習(7 セッションセミナー)	北大発！これからの国土－地域デザイン ～厳寒の森と湖の里で～	14	
★	1	文系 総合科目	4.50	高等教育推進機構	教授	亀野 淳	講義	選択	特別講義	大学と社会－先輩からの熱いメッセージ －冬	20	2021執筆
	2	理系 総合科目	4.48	工学研究院	教授	石井 一英	講義	選択	環境と人間	ロバスト農林水産工学(持続可能な社会に 向けて現場から学ぶ)	19	
★	1	理系 主題別科目	4.85	理学研究院	准教授	川本 思心	講義	選択	科学・技術の世界	北海道大学の「今」を知る	13	2022執筆
	2	文系 主題別科目	4.77	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	中川 理	講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅰ 論理思考の身に つけ方	38	2020執筆
	3	文系 主題別科目	4.75	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	中川 理	講義	選択	社会の認識	コンサルティング入門Ⅱ 発想転換の方法 論	41	2020執筆
	4	文系 主題別科目	4.69	文学研究院	教授	弓巾 和順	講義	選択	思索と言語	『論語』入門	13	2021執筆
	5	文系 主題別科目	4.58	教育学研究院	教授	松田 康子	講義	選択	思索と言語	手話と聴覚障害	16	同点
	5	文系 主題別科目	4.58	大学院教育推進機構	助教	MAZUR MICHAL MACIEJ	講義	選択	社会の認識	社会におけるビデオゲームの発展と役割	24	
★	1	文系 共通科目	4.36	経済学研究院	准教授	相澤 俊明	講義	選択	統計学		19	
	2	理系 共通科目	4.17	情報基盤センター	教授	布施 泉	講義	選択	情報学Ⅱ	Pythonプログラミング	22	
★	1	文系 外国語科目	4.65	メディア・コミュニ ケーション研究院	教授	GAYMAN JEFFRY JOSEPH	講義	必修	英語Ⅰ		17	2022執筆
	2	文系 外国語科目	4.58	メディア・コミュニ ケーション研究院	助教	堀 晋也	講義	必修	フランス語Ⅰ		18	2022ベスト・エクセレント・ティーチャー 2022執筆
	3	文系 外国語科目	4.58	メディア・コミュニ ケーション研究院	准教授	ロブ ナイジェル ゴッドフリー アイアン	講義	必修	英語Ⅰ		28	
★	1	文系 外国語演習	4.66	メディア・コミュニ ケーション研究院	助教	渡部 聡子	演習	選択	ドイツ語演習	C1:ドイツ語を楽しもうⅠ	20	
	2	文系 外国語演習	4.65	メディア・コミュニ ケーション研究院	准教授	齋藤 拓也	演習	選択	ドイツ語演習	C1:ドイツ語の文法と語彙に親しもう(Ⅰ)	22	
	3	文系 外国語演習	4.65	メディア・コミュニ ケーション研究院	准教授	LADREYT ALEXIS CLAUDE	演習	選択	フランス語演習	C1:LevelⅠ	23	
	4	理系 外国語演習	4.42	工学研究院	助教	中屋 佑紀	演習	選択	英語演習	中級:英語で学ぶ世界の水・環境・衛生の 科学	14	
	5	理系 外国語演習	4.34	情報科学研究院	教授	小野里 雅彦	演習	選択	英語演習	中級:人にやさしい先端テクノロジーを英語 で学ぶ	18	
★	1	理系 基礎科目	4.65	工学研究院	准教授	久保田 浩司	講義	必修	化学Ⅱ		18	2022ベスト・エクセレント・ティーチャー 2021執筆
	2	理系 基礎科目	4.53	理学研究院	教授	木村 敦	講義	必修	生物学Ⅰ		21	
	3	理系 基礎科目	4.50	理学研究院	教授	坂井 哲	講義	必修	線形代数学Ⅰ		47	
	4	文系 基礎科目	4.49	高等教育推進機構	教授	小林 由子	演習	選択	日本語演習	日本語学習のための心理学	10	
	5	理系 基礎科目	4.45	理学研究院	准教授	黒田 紘敏	講義	必修	微分積分学Ⅱ		14	
	6	理系 基礎科目	4.44	電子科学研究所	准教授	鈴木 明大	講義	必修	物理学Ⅱ		33	
	7	理系 基礎科目	4.40	工学研究院	准教授	中島 一紀	講義	必修	化学Ⅱ		18	

★ :ベスト・エクセレント・ティーチャー
★ :「授業内容・工夫等」執筆依頼者

※「所属部局名」「職名」は、令和5年度授業実施時点のものを記載

◎授業科目区分毎の授業アンケート実施者数(延べ)

一般教育演習	116 名
総合科目	39 名
主題別科目	108 名
共通科目	32 名
外国語科目	149 名
外国語演習	234 名
基礎科目	204 名
日本語に関する科目	12 名
計	894 名

一般教育演習(フレッシュマンセミナー)

「多文化コミュニケーション講座」

高等教育推進機構 杜 長俊

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

日本で暮らす外国人の生活や事情について引き出し、日本語能力が十分ではない学習者と豊かなやりとりを実践するとともに、外国人にとって住みやすい社会を作り上げるためにどんなことが必要なのかについて考える

※本授業で言う「外国人」は、外国にルーツがある人のことを指す

到達目標 Course Goals

- ・ライフストーリーを聞く活動を通して、日本で暮らす外国人の事情について自分の質問や言葉で引き出すことができる
- ・外国人とやりとりを行う方法を学び、日本語能力が十分ではない学習者と円滑に楽しく会話できる

授業計画 Course Schedule

前半:

- ①外国人のライフストーリーを読む
- ②外国人のライフストーリーを聞く
- ③聞いた話をまとめて発表する

後半:

- ①「やさしい日本語」「意味交渉」「自己開示」などを学ぶ
- ②日本語学習者(初級レベル)との会話を実践する
- ③実践を振り返る

成績評価の基準と方法 Grading System

- ・グループ発表(外国人のライフストーリー) 30%
- ・個人発表(実践した会話の振り返り) 30%
- ・授業の記録 20%
- ・自己評価 20%

■ 授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

「一般教育演習(フレッシュマンセミナー)多文化コミュニケーション講座」は、北海道大学の留学生と日本人学生が交流しながらともに学ぶ「多文化交流科目」として開講する。留学生10名と、日本人学生16名による多国籍・多文化のクラスである。本講座では、①日本で暮らしている外国人への理解を深めること、②日本語能力が十分ではない日本語学習者と豊かなコミュニケーションを行うことを目標とし、最終的に本講座の受講生を多文化共生社会に携わる人材として育成できることを目指す。

まず、目標①の実践として、プロジェクトAを実施する。プロジェクトAは、受講生たちの身近に暮らしている外国人に、その人の「過去、現在、未来」についてインタビューし、インタビューで得た情報をまとめ、グループで発表する。そして、目標②を実践するためには、プロジェクトBを実施する。プロジェクトBは、日本語能力が十分ではない日本語学習者と、初対面という状況で10分程度の雑談を行う。そして、雑談の中から1分間程度の会話を取り上げ、会話の中でうまく行ったところと、うまく行かなかったところについて振り返り、最後に意見交換を行う。それぞれのプロジェクトを実施する前に、「やさしい日本語」、「アイスブレイク」、「質問の記述」、「意味交渉」、「自己開示」等、様々なコミュニケーションの方法について練習する。上記のように、2つのプロジェクトを通して、本講座の受講生は、「プロジェクトの準備+実践」というサイクルを繰り返すことで、多文化共生社会の実現に携わるためのコミュニケーション能力を身に付けていく。

② 授業実施上の取組・工夫

【自分たちの話し合いから学ぶ】本講座は、講義形式の比重が少なく、グループの話し合いが主要な活動である。グループの話し合いは、毎回テーマが設定されており、そのテーマに関する動画や文章等をもとに行うが、話し合いの問いは、正解があるものではなく、観点が違えば、答えも違ってくるようなものになるように工夫する。こうした工夫は、文化、経験、価値観の多様性を、自分たちの話し合いの中で実感させるためである。また、グループの話し合いの後で、意見を共有する時間も設ける。その時間では、自分のグループと違った意見を知り、話し合いの中の多様な観点到に気づくことができる。さらに、授業の後で振り返りシートを記入してもらうが、お互いが記入した気づきを次の授業の冒頭で共有し、自分たちの話し合いから学ぶ意識を強化する。

【自分自身の目標を設定する】前述した通り、本講座は2つのプロジェクトによって構成される。2つのプロジェクトの目標について、教師がシラバスを引用しながら説明するが、教師が設定した目標に加えて、受講生が自分自身の目標を設定する。教師が設定した目標と違ってよい、自分自身が達成したい目標を考える。成績評価として自己評価を取り入れ、プロジェクトが終了した時点において、自分自身の目標の達成度を振り返り自分で評価する。こうした取り組みを通して、受講生が自分の学びを自分で管理する姿勢の育成を目指す。

【グループワークが円滑になる環境を作る】プロジェクトAでは、インタビューの協力者と連絡を取って日程を調整したり、インタビューの結果をまとめたり、お互いの協力を必要とする作業が多いため、誰がどんなことをするか、役割分担を明確にする必要がある。プロジェクトの実践に向けて、どんな作業や仕事が必要なのか洗い出し、分担について話し合う時間を確保する。そして、何らかの理由でグループワークに対して後ろ向きになってしまう受講生もいるため、授業の終了後に記入する振り返りシートに、「質問や感想があれば…」という項目を設ける。グループワークに対してお互いが感じている不安、疑問等、もやもやした気持ちを取り上げ、教師及び受講生の意見や感想を共有することで、グループワークが円滑になる環境づくりに取り組む。

③ その他

クラスで読んでほしい名前を共有し、お互いの名前を覚えることを推奨する。教師も受講生

を呼ぶ時に、名前で呼ぶようにする。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・学生間の交流が多く、とても濃密な15回の講義だった。
- ・活発に学生間で話をしたところ。
- ・留学生の方とたくさん話せて視野が広がりました。
- ・先生に熱意があり、そのおかげで自分たちが楽しかった点
- ・「やさしい日本語」という全く知らなかった概念を学ぶことができた。留学生の知り合いができた。
- ・すごくいい先生です
- ・クラスの雰囲気がよかったクラスの人達と仲良くなった
- ・留学生と日本人学生の交流が多かったので、自分が多文化コミュニケーションを受講した目的に適していた点

環境と人間

「ロバスト農林水産工学（持続可能な社会に向けて現場から学ぶ）」

工学研究院 石井 一英

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

北海道は日本の食を支える主要な食料生産地域であり、再生可能エネルギーのポテンシャルが豊富である。農林水産工学などの異分野融合かつ産官学連携した実際のフィールドでの先進的な農林水産業および再生可能エネルギーに関する取組を実学として学ぶ。

到達目標 Course Goals

農林水産工学の幅広い分野の先進的な取組について理解すると共に、今後の勉学や進路選択に有用となるべき基礎知識を身につける。環境、食、エネルギー、人間の関わりについて理解を深め、幅広く学問への興味や視野を広げる。

授業計画 Course Schedule

下記のように、全体概要、農学分野、林学分野、水産分野、工学分野、官学民の取組の合計 16 回の講義を行う。

1-2. ロバスト農林水産工学国際連携研究教育について 担当 石井一英

- ・オリエンテーション
- ・ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点について
- ・持続可能な社会形成のために必要な要素

3-6. 農学分野(4 回)

- ・酪農 担当 上田 宏一郎
- ・ワイン 担当 曾根 輝雄
- ・青果物の鮮度保持 担当 鈴木 卓
- ・収穫時期、食べ頃判断 担当 小関 成樹

7-8. 林学分野(2 回)

- ・木材化学 担当 浦木 康光
- ・林業ロボット 担当 澁谷 正人

9-10. 水産分野(2 回)

- ・養殖 担当 高橋 勇樹
- ・水産工学 担当 高木 力

11-14. 工学分野(4 回)

- ・生物分解性プラ 担当 松本 謙一郎
- ・波長変換フィルム 担当 長谷川 靖哉
- ・マイクロペーパーチップ 担当 渡慶次 学
- ・蓄熱技術 担当 能村 貴宏

15 官学民の取り組み(1 回)

- ・スマート農業 担当 野口 伸

※講義の順序は変更があるかもしれません。

成績評価の基準と方法 Grading System

授業回数の60%以上出席した者について、総合レポートの提出により成績を判定する。なお、「A+」は履修者の上位5%程度を目安とする。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

北海道は日本の食を支える主要な食料生産地域であり、再生可能エネルギーのポテンシャルが豊富である。農林水産工学などの異分野融合かつ産官学連携した実際のフィールドでの先進的な農林水産業および再生可能エネルギーに関する取組を実学として学ぶことを目的としている。到達目標として、農林水産工学の幅広い分野の先進的な取組について理解すると共に、今後の勉学や進路選択に有用となるべき基礎知識を身につける。環境、食、エネルギー、人間の関わりについて理解を深め、幅広く学問への興味や視野を広げることとしている。

内容は、オリエンテーションとして①ロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点について、②持続可能な社会形成のために必要な要素（①②は大学院工学研究院石井一英担当、以下同様）、農学分野として③酪農（農学研究院上田宏一郎）、④ワイン（曾根輝雄）、⑤青果物の鮮度保持（鈴木卓）、⑥収穫時期・食べ頃判断（小関成樹）、林学分野として⑦木材科学（浦木康光）、⑧林業ロボット（渋谷正人）、水産分野として⑨養殖（水産科学研究院高橋有樹）、⑩水産工学（高木力）、工学分野として⑪バイオプラスチック（工学研究院松本謙一郎）、⑫波長変換フィルム（長谷川靖哉）⑬マイクロペーパーチップ（渡慶次学）、⑭蓄熱技術（能村貴宏）、官学民の取組として⑮スマート農業（農学研究院野口伸）の合計14人の講師からなる15回のオムニバス講義である。

② 授業実施上の取組・工夫

本講義は、2018年～2023年度に設置されたロバスト農林水産工学国際連携研究教育拠点（ロバスト拠点）活動の一端を学生と講義という形で共有するために設けられた。ロバスト拠点は、農学、林学、水産学、工学など他分野の融合研究により、北海道の代表的な産業である第一次産業をロバスト化する（強靱化する）ための研究プラットフォームであり、実際のフィールドと企業、他大学、国及び地方の研究所と議論をしながら、研究シーズと現場ニーズを結びつけプロジェクトの立案及び研究活動をおとした人材育成を行う場である。いずれの講義も、現場ニーズと研究者がもつ強みであるシーズを、いかに産官学協働で社会実装に向かって活動してきたか、ということを中心に講義を行った。

学生にとっては、学問分野の融合、分野横断的、最先端、産学官の協力が盛り込まれた講義であるという点が魅力であったと思われる。また、オムニバス形式の講義では1回きりとなってしまうがちであるが、各教員とも講義後に質問に回答するなど、丁寧な対応を行った点も高評価であったと思われる。また、総合理系の1年生のみならず、人文科学系の学生や2～4年生までの幅広い学生層の受講者がいたことも、多様な分野の融合という点が魅力的であったと思われる。

③ その他

この度は、エクセレント・ティーチャーズに選んでいただきまして御礼申し上げます。これも、本講義を担当してくださった合計14人の先生方の皆様のおかげです。この場をお借りして

御礼申し上げます。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・学問分野の融合がどのように行われているかを知ることが出来る点。
- ・せつめいがわかりやすい
- ・内容が最先端、多分野でとても面白かった。このような農林水産系の講義を分野横断的に受講できたのは良い学びだった。
- ・様々な分野に関する講義を聞くことで、自分の視野が広がった点
- ・各教授の研究内容の説明ももちろん興味深く非常に面白い講義だったのですが、それに加えて学部の説明が非常に役に立ちました。私は総合理系で今はどの学部に行くか悩んでいるのですが、それに非常に役立ちました。そこが良かったと思います。
- ・様々な講師の方からいろいろな分野のことを学べたこと
- ・ネットで検索をかけても出てこないような研究の最先端を実際に研究している方の口からきくことができた点。授業後に質問に答えていただける先生方も多く、自分の関心について専門家の先生方の意見をうかがえたのもとても有意義だった。
- ・色々な分野を第一線で研究する様々な教授の話聞くことで自分の将来の研究などのイメージができた点

思索と言語

「手話と聴覚障害」(論文指導)

教育学研究院 松田 康子

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

日本手話は、独自の文法を持つ、日本語とは異なる言語です。聴覚障害とは、単なる聴覚器官の障害ではありません。音声言語中心の社会に存在する、様々な障壁によって引き起こされる障害です。また、聴こえないことを自然なことと捉え、手話を用いて生きる、ろう者と呼ばれる人々がいます。この授業は、これらについて学習します。そして、手話で簡単な会話ができることと、手話や聴覚障害(者)についての知識の再構築をめざします。

到達目標 Course Goals

1. 日本手話は日本語と異なる言語であることがわかる。
2. 日本手話の文法を用いて、簡単な会話ができる。
3. 聴覚障害は社会的障壁(disability)が引き起こす障害であることを理解できる。
4. ろう者とはどのような人なのか、理解できる。
5. 大学や職場など、様々な場面での、聴覚障害者やろう者との関わり方がわかる。
6. 手話と聴覚障害についての知識を再構築し、より深く理解できる。

授業計画 Course Schedule

授業は、原則として手話の実技を1時間、聴覚障害についての講義を30分行います。下記の計画は、変更の可能性もあります。

実技編

1. よこそ手話の世界へ
2. 講義あるの？あるよ
3. 手話わかる？ わからない…
4. 私は山本、あなたは？
5. 感想書いた？ うん、今書いているところ
6. 質問があれば、書いて、あちらに提出してください
7. 今日は6月1日、指文字を46個覚えます
8. 今日は何月何日？講義が始まる時間は？
9. 今週から来週まで、毎日8時間、手話を学ぶつもり
10. 明日バイト行かなきゃいけない
11. 長めの自己紹介をしてみよう
12. これ一番好きなやつ！食べてみたい！
13. 大学は楽しい？つまらない？どっち？
14. 聞こえないので、手話で教えてください
15. 実技のまとめおよび試験

講義編

1. ガイダンス・手話や聴覚障害に関する様々な用語と意味
2. 聴覚障害・ろうとは何か？(1)
3. 聴覚障害・ろうとは何か？(2)
4. ろう教育と手話の歴史 ヨーロッパ・アメリカ編
5. 日本史に見る聴覚障害(1)
6. 日本史に見る聴覚障害(2)
7. ろう教育と手話の歴史 日本編
8. 質問への回答や補足説明
9. 手話と聴覚障害(1)
10. 手話と聴覚障害(2)
11. 情報保障(1) 手話通訳を中心に
12. 情報保障(2) ユーザーの視点から
13. 質問への回答や補足説明
14. デフフッド(Deafhood)・まとめ
15. 実技のまとめおよび試験につき、無し。講義全体を通した感想提出あり(宿題)

成績評価の基準と方法 Grading System

- (1) 手話実技は、毎回の授業への姿勢、及び実技試験に基づき評価します。
- (2) 聴覚障害についての講義は、レポートに基づき評価します。
- (3) 評価率は(1)と(2)それぞれ 50%を目安とします。
- (4) 9 回以上(履修登録完了期間後)の出席を成績評価の条件とします。

出席状況確認システムを必ず授業前後でかざすこと。講義開始後30分以降の遅刻は欠席とみなします。無断中途退室は禁止します。学生証を忘れた学生は授業開始前に TA に申し出ること。授業終了時あるいは後日に申し出ても欠席扱いとします。かざし忘れも欠席となるので、留意するように。各自、出席状況をWEBにて確認し、疑義がある際は TA まで速やかに申し出ること。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

この授業は日本手話、そして、ろう者について学びます。日本手話で簡単な会話ができることと、手話や聴覚障害に対する思い込みの修正、そして知識の再構築をめざします。

授業は責任教員、ろう者講師(担当教員)、手話通訳者、TA のチームワークにより行いました。次項②はろう者講師、③は責任教員が執筆しました。

② 授業実施上の取組・工夫

授業は「実技編」と「講義編」に分けています。日本手話(以下手話)を、ていねいに教える観点から、定員 20 名で行います。教室は椅子のみを扇形に配置します(写真)。これにより学生は、ろう者講師(以下講師)の表出する手話が見やすく、学生同士の表出確認等もしやすくなります。また講師



も学生の表出を確認しやすくなります。

実技編は、単語や文法、大学生活に即した例文を学生に教え、表出させます。この時間は、手話通訳者が学生達の背後に立って講師に相對し、講師が手話で教える内容を読み取り、音声日本語に翻訳し、学生に伝えます。手話通訳者はさらに、学生の手話表出にも目配りし、気になることを、学生達の背後から講師に手話で伝えます。講師はそれも見つつ、教える内容の微修正を行います。この連携が、ていねいな指導の肝です。

続く「実践」の時間では、学生一人ひとりに、講師との手話による直接会話に挑戦させます。講師は学生の理解度を確認しつつ、一人で手話を表出する勇気と、手話が伝わりあう喜びを得られるよう努めています。

また実技編は、学生に理解できる表出が増えるにつれ、手話通訳を徐々に減らし、手話で手話を学ぶ授業に変わります。

講義編は講師が手話で講義を行います。学生は手話通訳者が音声日本語に翻訳した内容を開きます。講義は、医学、教育、歴史、アイデンティティ等の諸問題を通し、音声言語を用いるマジョリティである北大生が、今まで考えたことのない(であろう)、ろう者、という存在を可視化させます。

また学生には毎回、授業への感想や質問、疑問等を提出させています。講師は質問、疑問等への応答だけでなく、感想から立ち表れる、表出の行き詰まり等の悩みにも助言しています。特に学生が共有すべき質問、疑問等は、講義編の中で取り上げ、講義形式での返答も行っています。

この授業の様子はTAと責任教員が毎回ビデオ撮影し、資料と合わせてアップロードします。学生はいつでも、復習や欠席回の視聴ができます。

③ その他

本授業にある即時性と後刻性は、他の教員の授業改善の参考になるかと思います。即時性は、写真のような座席配置のもと、即時に手話表出の修正フィードバックを行うことと「実践」でのチャレンジに加え、例文をタイムリーでごく身近なものとする事で、すぐに表出してみたいくなる（取り入れてみたいくなる）という性質のものです。後刻性は、レポートに回答する形のフィードバック、授業動画視聴による復習という形で設定されています。インプットとアウトプット、相互の往復が常に保障されています。また、こうした積み上げを前提に授業内容が組み立てられていたことも参考になるかと思います。熱心な学生は、授業が始まる直前にスマホで授業動画を再度視聴せずにはいられないようでした。

授業内容にアクセスするルート、コンテンツ、フィードバックの機会を複数用意しておくことは、他の授業実践においても参考になると考えます。

また、異言語を学ぶ際に、背景にある文化や歴史を知ることにより学生の内にあるマイノリティ性との対話が促進され、一方的ではなく互いをリスペクトし多様性にひらかれていく土壌が耕されていくことも、何か他の授業改善につながることを願い記します。

授業改善を本気で考えたとき、それは教員一人で担えるものだろうかという疑問が浮かびます。本授業は、ろう者自身が講師となり教授することに意味があるものです。当事者だからこそその言葉が響きます。ですが、同時に、授業コンテンツを揃えるスタッフ（手話通訳者・TA・責任教員もその一人）の存在は欠かせなかったと思います。手話通訳者もその精度を授業

後に必ずチェックし、通訳が行き届かなかった箇所については、後日修正をしていました。改めてチームで取り組むことの良さもお伝えしたいと思います。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・実際に手話を行う時間と講義を聞く時間のバランスが良い
- ・手話を丁寧に学べたこと
- ・先生が楽しそうだった
- ・対面で手話を学ぶことができた点。当事者目線での聴覚障害について知ることができた点。
- ・資料だけではなく、映像で全ての授業を復習することができたので、とても復習しやすく、手話を身につけやすかった点。
- ・実際に実技をしたり、その後には講義で手話や聴覚障害について学ぶ機会が設けられていた点。
- ・手話単体ではなく、手話の歴史など様々なことに触れられた点が良かったと思います。
- ・聴覚障害やろう者について、自分が誤ったイメージを持っていたことに気付かされた。そしてその認識を改め、今後ろう者とどう向き合っていくべきかを、自分なりに考えることが出来た。基本的な手話を身に着けることが出来た。
- ・以前から学びたいと思っていた手話について学べたこと。手話や聴覚障害について新たな知識を得ることができたこと。

社会の認識

「社会におけるビデオゲームの発展と役割」

大学院教育推進機構 MAZUR MICHAL MACIEJ

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

ビデオゲームは、私たちを楽しませ、情報を与え、挑戦させる、世界的に定着したエンターテインメントメディアです。この「社会におけるビデオゲームの発展と役割」という授業は、世界最大のゲーム市場の一つである日本に焦点を当て、大衆文化の中でのビデオゲームという現象を包括的に理解することを目的としています。この授業では、ゲーム業界に長年従事してきた経験に基づき、ビデオゲームの基礎と現代社会におけるビデオゲームの役割への理解を深めることを目的とします。15回の授業を通して、学生はビデオゲームの文化的意義を批判的に分析し、理解する方法を学びます。授業終了時には、授業で得られたビデオゲームに関する知識に基づき、独自のアイデアを展開できるようになることを目指します。この授業は特に、文化現象としてのゲームについてもっと知りたい、電子エンターテインメント業界でのキャリアを考えているという方に適しています。

到達目標 Course Goals

この授業に参加することで、学生は以下のことができるようになる。

- 1) ゲームに関する基本的な理論、メカニズム、方法論、概念について説明できる。
- 2) 授業で紹介した概念装置や枠組みを用いて、ゲームを批判的に分析することができる。
- 3) ゲームが社会や文化に与える影響について広く考察する。
- 4) 創造的思考を駆使して、ビデオゲームのコンセプトのアイデアを開発することができる。

授業計画 Course Schedule

第1回 オリエンテーション

講座の概要、進め方、評価方法などを紹介します。

第2回～第3回 文化の中のビデオゲーム

「ゲーム」とは何でしょうか？日本や世界の文化の中で、ゲームはどのような役割を担っているのでしょうか？

第4回～第7回 ビデオゲーム分析

ビデオゲームを批判的な視点から分析し、その基本的なメカニズムを認識・評価し、ビデオゲームに関する論理的な分析レポートを作成する方法について学びます。

第8回～第9回 キャラクターとストーリー

現代社会におけるビデオゲームの文化的な位置づけ、多様な社会集団の表現方法、そしてビデオゲームの物語がプレイヤーの体験に与える影響について学びます。

第10回～第12回 エンターテインメントが十分でないとき

いかにしてビデオゲームは、単なる娯楽という枠を乗り越えてきたのでしょうか？ゲーミフィケーションとシリアスゲームの影響、ゲーマーアイデンティティの多様化、そしてビデオゲームのリスクについて考えます。

第13回～第14回 セッション ビデオゲームの開発

ビデオゲーム業界の構造や慣習を概観し、独自のビデオゲームコンセプトを提案する方法を紹介します。

第15回 セッション 最終セッション

全コースのまとめと期末試験。

成績評価の基準と方法 Grading System

受講生は、以下の評価に基づいて評価されます。

- (1) 小テスト(目標 1) 15%
 - (2) 課題(目標 2、3、4) 55%
 - (3) 期末試験(目標 1、3) 30%
- 4 回以上欠席した場合は、期末試験を受けることができません。

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

目的：本授業は、大衆文化の中でのビデオゲームという現象を包括的に理解することを目的としています。この授業では、ゲーム業界に長年従事してきた経験に基づき、ビデオゲームの基礎と現代社会におけるその役割への認識を深めることを目指します。

内容：本授業は、文化の中のビデオゲームの役割、ビデオゲームの批判的分析、キャラクターとストーリーがプレイヤーの体験に与える影響、ゲーミフィケーション、シリアスゲームの影響、ゲーマーアイデンティティの多様化やビデオゲームのリスクを取り上げます。さらに、後半では、ゲーム業界の構造を概観し、独自のゲームコンセプトを提案する方法を学びます。

到達目標：この授業を通じて学生は、ゲームに関する基本的な理論、メカニズム、方法論、概念を説明し、授業で紹介した概念装置や枠組みを用いてゲームを批判的に分析できる能力を身に付けます。また、ゲームが社会や文化に与える影響を広く考察し、創造的思考を駆使してビデオゲームのコンセプトを開発できるようになります。

② 授業実施上の取組・工夫

私の授業に対する学生の強い満足度や、高い関心度や評価の理由としては、以下の5点が挙げられると思います。

- 1) 授業はバイリンガルで行われ、シラバスでは学生が基本的な英語でのコミュニケーション能力を持つことを前提としますが、英語能力自体は評価の対象としません。学生はレポートでも授業の発言でも、日本語か英語を選択できます。私の評価対象は、その内容やアイデアであり、それゆえ英語能力の低い学生でも、自然に授業を理解し、積極的創造性を発揮できます。
- 2) スライドの内容を学生に配布する代わりに、授業前にスタディガイドを Moodle で提供しました。これを学生は予習・復習に活用し、クイズや課題に関するヒントを得たり、理解が不十分なところを再確認したりしました。
- 3) 出席できなかった学生や授業後に内容を復習したい学生のために、オンデマンド授業動画も用意しました。
- 4) ゲームジャーナリズムやゲームデザインのピッチなど、ゲーム業界における実際に即した課題を設定し、コースワークの関連性や魅力を高めました。このような実践的な課題は、将来のキャリア形成への意欲や関心を高める効果があります。
- 5) ビデオゲームの特殊性を考慮し、文章中心のスライドを見せるのではなく、ゲーム映像な

どのマルチメディアリソースを活用しました。概念や情報を効果的に伝える強力なコミュニケーション手段としてイメージや動画を用いたことで、授業効果が高まりました。

学生参加促進：すべての授業課題は、学生がゲーム業界の実際の役割をシミュレーション的に体験できるように設計されています。例えば、学生がゲームジャーナリストとして、自分で選んだビデオゲームを批判的に分析する課題や、ゲームデザイナーとして、新しいゲームアイデアをピッチし、プロジェクト実施を支援者に説得するという課題が与えられました。これらを通して、学生はプロジェクトの完成のための最良の方法を理解できました。またこの授業の実践性は、学生を教室の外と結びつけました。

成績評価：評価方法は、以下の通りです：

- ・ クイズ： 主要な概念の理解を評価する定期的なクイズ
- ・ 課題： 内容の質、創造性、批判的思考に基づいて分析しているかを評価するエッセイおよびゲームデザインのピッチ
- ・ 期末試験： 総合的ですべての授業トピックに関する包括的な理解や知識の定着を評価する試験

学生は評価方法が公正で、彼らの理解と努力を反映していると感じ、このことも授業に対する全体的な満足度を高めました。

③ その他

授業は講義形式を採用していますが、アクティブラーニングのさまざまな戦略を採用しています。例えば、Q&A や投票、さらに少人数での意見交換を推進して授業を進めています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・ 色々な視点でゲームを捉えることができたこと。
- ・ I liked how the lectures covered quite a range of content from the video game industry, from the analysis of games, to the backgrounds/insides of the video game industry. The lectures were very interesting and engaging since a variety of clips were covered during the classes, and assessments were quite unique.
- ・ 悪かったところを考えられないことが良かった
- ・ 授業は英語で行われるが、テストなどの回答は日本語でも大丈夫な点。英語に触れる機会を増やしたかったが不安もあった私にはありがたい対応だった。
- ・ ゲームを通して経済、心理学など、さまざまな分野の学問に触れられた点。AIのイラストを用いて課題を作成できた点。課題について教員に添削をもらった点。
- ・ どのような考え方でゲームが作られているのかを知れたこと
- ・ 日本人以外の教授によるグローバルな視点によって新たな考え方や物事の見方を得ることができたこと。また、教授のゲームに対する愛情、熱意がかなり伝わってきたこと。
- ・ 先生の熱意や気持ちが伝わってきたし、楽しく授業を受けることができた。スライドも映像が多く使われ、理解しやすかった。
- ・ I really enjoyed the course, and thought that the content was very interesting. I

especially liked the game review task, it was a fun challenge to apply an analytical framework to something I enjoyed, and good writing practice. I also appreciated the use of visual materials in class, which made it engaging and easy to understand.

- ・I liked the amount of resources that were made available to use. I also enjoyed that the lectures were made to keep the class engaged in the subject matter.
- ・授業の説明の際に様々なゲームの映像が流れるのが面白かった。
- ・It was clearly structured and easy to follow. The instructor also seemed really passionate about the subject and managed to show video games from a more academic perspective. All the assignments were engaging and informational.
- ・ゲームについて学問的にアプローチするという、今まであまりないような内容で勉強になった。また、英語の講義に参加するためのいい準備になった。
- ・いろいろなゲームを（ちゃんとしたゲーマーでないと知らないようなゲームも）例に出しながら講義に関する解説を行っていた点。
- ・基本的には英語での授業だったが、少し難しめの英単語は日本語でも表現する
- ・課題などでは日本語の記述が認められる等、日本の学生にもかなり配慮をしていた点。
- ・期末テストの日、講義を欠席してしまったのですが、後から連絡をしたところ、テストを後日受験させていただけることになりました。先生方の手厚いサポートに、大いに感謝しております。
- ・実際にゲームの開発の仕事に携っているかたのお話を聞いたのがよかった。ゲームを作る側も、できたゲームを分析することも両方学べた。

統計学

経済学研究院 相澤 俊明

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

統計学は、データをどのように分析し、それに基づいてどのような判断をくだしたらよいかを論ずる学問であり、あらゆる実証研究に関わる人の方法的基礎となっている。実社会においても、意思決定におけるデータ情報の重要性が認識されてきたため、統計的なものの考え方や統計手法を実践する必要性は非常に高まっている。本講義により、統計的なものの考え方を理解し、統計手法の適切な使用法の基礎を身に付けることを目標とする。

到達目標 Course Goals

データ解析のための基礎的な統計手法に基づいて、データからの情報を引き出し、判断や意思決定を行う手続きができるようになるため、具体的に以下を到達目標とする。

1. 記述統計の基礎: 統計データは数字の集まりであり、そのまま眺めていても全体の傾向は見えてこないが、統計データの記述・整理(平均値, グラフ化などの統計処理)を行うことにより、データの特徴や傾向を把握することができる。
2. 確率変数と確率分布: 統計的推測においては、統計データの発生メカニズムについて、確率的な要素を含むモデルとして定式化を行う。この定式化のために必要不可欠な確率変数について、様々な具体例を用いながら、確率計算・モーメント特性の把握などを行うことができる。
3. 推測統計の基礎: 統計的推測とは、サンプルデータに基づいて母集団分布に関する推測を行うことである。統計的推測には、母集団分布の特性値を推定するための方法(統計的推定法)と母集団分布に関する仮説を検証するための方法(統計的検定法)がある。特に、母集団分布として正規分布などを仮定した場合の統計的推定法および検定法を、理論的な理解の上に立ち、実データを用いた統計的手続きが実践できる。

授業計画 Course Schedule

1. ガイダンス
2. データの整理と記述(データの全体像)
3. データの整理と記述(データの特徴値)
4. 確率の基礎
5. 確率変数と確率分布の基礎
6. 多次元確率分布
7. 代表的な確率分布
8. 大数の法則と中心極限定理
9. 母集団と標本
10. 正規母集団からの標本
11. 点推定と区間推定
12. 仮説検定(母集団平均に関する検定)
13. 仮説検定(母集団平均の差に関する検定)
14. 分割表を用いた仮説検定
15. 総復習

加えて、適切な時期に中間試験と期末試験を実施する。

成績評価の基準と方法 Grading System

成績評価は以下の基準で行います。

・学期末試験 70 点

・平常点 30 点

の合計点に基づいて、次のように評価します。

A+:95-100, A:90-94, A-:85-89, B+:80-84, B:75-79,

B-:70-74, C+:65-69, C:60-64, D:50-59, D-:0-49,

F:学修成果を示す評点無し

■授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

統計学の授業では、データ解析のための基礎的な統計手法に基づいて、データから情報を引き出し、判断や意思決定を行う手続きができるようになるための基礎学力を身につけてもらうことを目標としています。私が担当した統計学のクラスでは、授業内容を主に4つの単元（確率論、確率変数と確率分布、統計的推論、仮説検定）に分け、規定の回数内で行うという構成にしています。各単元を終えた後には、理解定着のための確認問題を課題として出し、理解度を高める工夫をしています。期末試験には、同じ難易度の問題が出ると事前に告知していたため、学生は復習がしやすかったようです。

② 授業実施上の取組・工夫

授業はスライドを用いた標準的な形式ですが、講義資料は書き込み式のものを私が作成し、授業で解説される式展開を学生が適宜メモを取りながら学んでいくスタイルにしています。数式展開は自分で書いてみて初めて理解できることが多いので、あえてこのようなスタイルを取っています。統計学は数式展開を多用する科目であり、数式だけでは無味乾燥な授業になりがちです。そこで、現実の経済現象や具体的な例を多く取り入れた授業を意識しました。統計学がどのように実社会で使われているのか、統計学の知識が2年次以降の専門科目でどのように応用されるのかをイメージできるように幅広い例を紹介することを心がけました。既習事項であっても、その知識が使われる場面では、復習としてその都度スライドに復習事項を載せるようにしていましたが、学生からの評判は良かったです。

さらに、スライドへの書き込みはタブレット端末を用いて行っており、板書が間に合わなかった学生や授業を欠席した学生にも板書内容がわかるように、その日の板書内容はPDFファイルに変換してELMSにその日のうちにアップすることを心がけました。また、ELMS上で質問フォーラムを設け、学生が授業内容について質問できる環境を整えました。

③ その他

授業外でも、オフィスアワーを設定し、個別の質問や相談に応じることで、学生の理解を深める支援を行っています。このように、学生一人ひとりの学習進度に合わせた柔軟な対応を心がけています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・説明がとても分かりやすかった。
- ・解説が非常にわかりやすく、統計学を楽しめた。
- ・iPadを用いて分かりやすく解説されていた。
- ・レジュメがとても分かりやすかった点。

英語 I

メディア・コミュニケーション研究院 ロブ ナイジェル ゴッドフリー イアン

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

This course will provide students with basic skills and practice in reading English texts. This will provide students with preparation for applied and developed classes in the second semester and beyond.

到達目標 Course Goals

By the end of this course, students will be able to:

1. Confidently approach various styles of texts in English.
2. Use reading strategies to extract meaning from English texts.
3. Summarize and critically appraise English texts.

授業計画 Course Schedule

Week 1 will be an introductory lecture explaining important information about the course. Weeks 2 – 13 will involve lectures, as well as individual and group activities designed to help students develop practical skills in reading English texts. In weeks 14 and 15, students will give presentations.

成績評価の基準と方法 Grading System

50% participation

50% presentation project

More information about how the course is graded will be explained in the first class

■ 授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

The aim of this class is to provide students with the basic skills needed to read competently in English. This aim is based on the principle that reading in English is an essential skill, which gives students access to useful information, alternative viewpoints, and global perspectives. Students have the opportunity to read a variety of different kinds of English texts, including quite advanced scientific papers, and texts that they choose to read themselves for pleasure. In addition, students are given the opportunity to practice using English in the classroom through frequent discussions with each other and with the instructor. Students are encouraged to read large quantities of text and to read in different ways, depending on the text and their purpose.

② 授業実施上の取組・工夫

This course engages students with two kinds of English reading: extensive reading of easy texts and intensive reading of difficult texts.

In extensive reading, students are told to select texts that they want to read and that are not too difficult. Students are frequently reminded that if they find themselves repeatedly having to learn new vocabulary, then the text is too difficult and they should find something easier. Students are also told to read things that excite them, including novels, articles about their hobbies, or translations of books they have previously enjoyed reading in Japanese. Students read extensively in their own time, both for homework and during on-demand classes, and are required to submit regular reports on their progress. Students are not assessed on their knowledge of the texts they read; instead, the instructor gives students autonomy and encourages them to take responsibility for their own reading.

In intensive reading, students are tasked with group readings of difficult texts, primarily scientific papers. Here, students are taught how to use reading strategies such as previewing the text, making predictions, drawing on one's background knowledge, using the context to "work it out", and deciding what to read and what to ignore. Students are also encouraged to develop a metacognitive attitude toward reading, which includes planning their reading, monitoring and evaluating their progress, and connecting the content with their own experience. Reading is presented as a kind of detective work: using one's ingenuity and intelligence to crack the code and construct the meaning of the text. Finally, through frequent group work, students are encouraged to develop a reading community with their peers, in which they use discussion, group problem-solving, and their collective knowledge to make sense of texts.

③ その他

In order to alleviate student anxiety, classes are informal and involve frequent conversation between students and with the instructor. It is also emphasized that students' English level is not being assessed. Students are encouraged to view themselves as users of English as a global language, which has more non-native speakers than native, and no one "correct" way of using it.

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・授業内容
- ・すべてよかった
- ・発言できる機会が多くある
- ・課題についての説明が明確だった点
- ・授業内容が易しく楽しかった。
- ・英語で本を読むことが意外と面白いと気付かされた点。

ドイツ語演習

「C1: ドイツ語を楽しもう I」

メディア・コミュニケーション研究院 渡部 聡子

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

ドイツ語を「コミュニケーションのための手段」、並びに「ドイツ語圏・中欧への扉を開く鍵」と位置づけ、「聞く・話す・読む・書く」の4技能のしっかりした基礎を身につけることを目指します。またドイツ語によるコミュニケーションの文化的要素についての学習も行います。

到達目標 Course Goals

(1) ネイティブスピーカーのスピードに慣れ、簡単な表現の聞き取りができる。(2) シャドーイングなどの訓練を通じて、日常会話レベルの自然な言い回しを習得する。(3) 家族、趣味、食べもの、天気などの身の回りの生活について、簡単な表現で説明することができる。

授業計画 Course Schedule

この授業では、ドイツ語のコミュニケーションを楽しむことで、さらなる学習へのモチベーションを高めるため、特に、「聞く」と「話す」ことに重きを置いています。したがって、出席はもとより、主体的かつ積極的な授業への参加と、定期的な予習と復習が要求されます。また、授業中に随時ドイツ語圏の事情や文化についても学びます。

成績評価の基準と方法 Grading System

成績評価は、到達目標の達成度に応じて行います。具体的には、積極的な学習態度(授業への取り組み、小テスト、課題提出、発表等を含む平常点)60%、達成度を測る試験 40%を目安に行います。最終的な評価(「A+」から「F」までの11段階)においては、成績に極端な偏りが生じないよう十分配慮します。

■ 授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

本授業の目的は、ドイツ語を学び始めたばかりの学生が、「聞ける」「話せる」「使える」体験を積み重ね、ドイツ語圏の歴史や文化について知ることを通じて、聞く・話す能力を養い、同時に、ドイツ語を学ぶモチベーションを維持・向上させることにあります。

② 授業実施上の取組・工夫

「聞く」能力を養うための教材として、ドイツで制作された語学学習用の動画を主に利用しました。文法や単語は、ごく初級向けの簡単なものですが、ネイティブスピーカーによる会話を正確に聞きとることは容易ではありません。特に、動詞の人称変化を習って間もない初学者は、敬称と親称、いずれの二人称を用いるかにより動詞の形も異なる、というドイツ語の特徴にもまだ慣れておらず、とりわけ会話文の聞きとりは難しいものです。そこで、会話文の聞きとり際に際しては、視覚情報を頼りに、親しい間柄なのか、距離のある間柄なのか、その関係性をまず判断し、そのうえで、動詞の形を予想しながら聞きとることの重要性を繰り返し、伝えました。加えて、授業の間、同じ動画を何度も視聴し、最後に字幕を加えた状態でもう一度

聞きとる、という訓練を継続しておこなうことで、ネイティブスピーカーの速さと発音に少しずつ慣れていけるよう工夫しました。また、「数詞」は、使用頻度が高いにもかかわらず正確に聞きとることが非常に難しいため、重点的に扱いました。

「話す」能力については、ほぼ毎回、グループワークをおこない、ドイツ語で発言する機会、グループで発表する機会を多く設けました。会話表現の選定に際しては、いつかドイツ語圏に旅行してみたい、と、思ってもらえることを願い、挨拶や自己紹介をはじめ、自分の家族や出身地についての説明、レストランでの注文など、実際の日常会話でよく使うものを扱いました。また、学習した会話表現の定着を図るため、学期中に2回、ドイツ語のみで面接試験を実施し、さらに最終課題として、学期中に学んださまざまな表現を応用し、「週末の予定を計画する」をテーマにグループ発表にも挑戦してもらいました。

③ その他

試行錯誤しながら授業を続けてきたなかで、今回、このように評価いただけたことを大変光栄に思います。ただ、学生の積極的な参加を前提とした授業構成のため、受講者の元気で明るい学習態度にも大いに助けられました。また、聞く・話すことを目的とする授業形式にはいくつかの課題もあると感じております。第一に、動画視聴と聞きとり、発音練習、グループ発表とその準備、といった活動にはある程度長い時間を要するため、授業で扱う単語や文法、表現は限定的な内容にとどまります。容易な表現を反復により定着する、楽しみながら学ぶ、というコンセプトには合致するものの、より新しい知識を得てさまざまな表現を学びたい、といった意欲ある学生にとって、やや退屈な内容となる可能性は否めません。第二に、グループワークは積極的な授業参加を促し、実際に話す訓練の場としても機能しますが、たとえば、気心の知れた間柄か、本授業以外で接点の無い間柄か、といったグループメンバーの構成や、人前で発表することへの慣れや得手不得手、などの個性により、グループでの活動を楽しみ、うまく活用できる場合と、あまり楽しめず、十分に活用しきれない場合があります。これらの課題について、少しでも改善できるよう、今後も工夫を重ねてまいりたいと思います。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・グループワークが多かったこと。
- ・ドイツ語初学でも取り組みやすいように動画中心で授業を進めてもらったことが、モチベーションの面でもよかったと思う。
- ・ドイツ語で自ら発言できる機会があるのは、嬉しい。必修科目のドイツ語Ⅰと並列してやるとかなり効果のほどを実感できる。
- ・教員が優しく、テストなどの時も緊張しすぎずにできた。
- ・日常的な会話や基礎を分かりやすく学ぶことができ、初習外国語でもついていきやすかった。先生が丁寧で、優しいので参加するのも全く苦ではなかった。ドイツ語を楽しめました。
- ・初めて学習するドイツ語で、早いうちから聞き取りや会話ができたのがよかったです。ビデオを使って表現を学ぶのは、楽しみながら生のドイツ語に触れられてとてもよかったと思います。
- ・私は第二外国語でドイツ語を履修しています。なので、このドイツ語演習の講義は第二外国語の考查の対策にもなり、学習意欲を促進してくれるといった点で、非常に優れていると思います。

した。

- ・授業内での解説、個人面接などのフィードバック等、とても丁寧でした。初習のドイツ語をグループ活動などを通して楽しく良い雰囲気で行いました。
- ・映像授業で身近なドイツ語に触れつつ、発表や面接を通して、それを自分自身のドイツ語力として養うための練習ができたところ。楽しくドイツ語に親しむきっかけが出来た点。
- ・この授業でドイツ語1で学んだ文法知識がより定着した実感があった点。
- ・ビデオを見ることでネイティブの発音に慣れる事が出来た。
- ・ドイツ語初学者のレベルに合わせて授業を進行してくれた点・先生に質問しやすい空気ができていた点
- ・実際のドイツ語の動画を見ることで楽しく学習できた点
- ・全然分からなくても話してみる、聞いてみる、やってみるのスタンスで進めていくことで、知識的に足りない部分も明確になり、課題が見えてきたから、もっと知識をつけて、自信を持ってドイツ語を扱ってみたいと思えた。
- ・文法だけでなく、実際に使われる表現を学べたり、実際の発音を聞けたりする点が良かった。また、間違っていたら先生が逐一指摘してくれるのも非常に助かった。
- ・ドイツの文化も学べた。動画の中の生きたドイツ語を聞けて良かったです。他の演習ではやらない、面接ができたこと。
- ・ドイツ語のリスニングやスピーキングといった必修のドイツ語ではあまり扱われないことについてわかりやすく学べたので有意義な講義だった。必修で学んだことが少ない段階でも、これだけのことを話せるんだということが実感できたのが良かった。
- ・教材が面白くて、学んでいてとても楽しかった。
- ・日常会話で使えるようなドイツ語をたくさん教えていただいたところが良かった。

生物学Ⅰ

理学研究院 木村 敦

■ シラバス

授業の目標 Course Objectives

生物学は、大きく二つの分野に分けられる。生物を構成する基本単位である細胞の構造と機能を中心に、生物の共通性について調べる「細胞生物学」分野と、地球上において放散・進化してきたさまざまな生物個体を出発点に、生物の多様なあり方を調べる「生物多様性」分野である。生物学Ⅰでは、すべての生物に共通する原理「細胞生物学」の基礎を理解する。

到達目標 Course Goals

無生物である分子がどのようにして生命を作っているのか、生物の基本単位である細胞の中でどのような反応が起るのか、細胞の増殖や遺伝に関する基礎概念を理解することで、さまざまな生物や多様な生命現象の基盤に共通のメカニズムがあることを説明できるようになる。現代生物学の全体像を理解するためには、この授業の履修とともに、生物学Ⅱも履修することが望ましい。

授業計画 Course Schedule

生物学とは：生物学の意味と歴史的背景について理解する。

生体高分子の構造と機能：タンパク質、核酸、糖質、脂質等の構造と機能について理解する。

細胞の構造と機能：細胞内小器官の構造と機能とそれを統合した生命活動について理解する。

エネルギー代謝と生合成：食物(栄養)がエネルギーとなるまでの代謝過程とその制御過程について理解する。

細胞の成長と分裂：細胞周期の制御と細胞分裂過程と制御過程について理解する。

遺伝の基本的メカニズムと遺伝子発現の制御：遺伝現象の分子機構とその制御過程について理解する。

成績評価の基準と方法 Grading System

受講状況、レポートおよび試験の成績により、下記の点から総合的に評価する。1) 基礎的知識を正確に理解できているかどうか、2) 知識を関連づけて理解できているかどうか、3) 講義で提示された内容を発展させ、自ら調査し、説明することのできる力を身につけたかどうか、4) 議論や質問を通して授業へ積極的に参加したかどうか。評価は相対的評価をとっており、「A+」は履修者数の上位 5%以内を目安とする。

■ 授業の取組・工夫等について

① 授業の目的・内容

生物学は生命の営みの基本原理を探究する学問で、分子レベルから生態系レベルまで幅広い分野に及び、我々の生活に身近な学問です。本学の生物学では、これをミクロなレベルでの共通性とマクロなレベルでの多様性としておおまかに分け、生物学Ⅰでは細胞レベルのミクロな共通性を学びます。履修者の多くが入学して間もない時期であることから、私は学生たちが生物学の身近さ・面白さに気づき、生物学を好きになってくれるように心がけながら講義をしています。講義の形式自体は他の多くの教員と大差ないように思うのですが、私が気をつけているポイントを以下に述べます。

② 授業実施上の取組・工夫

まず現状のカリキュラムでの生物学には、高校の生物学を履修した学生と未履修の学生が混在しているという難しさがあります。生物学Ⅰの内容の多くは、高校の生物学と重複するものなので、高校生物履修者には単なる復習と感じられる傾向があります。一方、高校生物学を未履修の学生にとっては、突然たくさんのことを暗記しろと言われてるように感じてしまう傾向があるようです。さらには、移行先の学部学科が決まっている学生と決まっていない学生が混在していて、移行先が決まっていない学生たちにとって成績評価は極めて高い関心事項です。これらの事情を認識したうえで、私は「学生たちの声をなるべく拾うこと」と「成績評価を公平に行うこと」の2点を特に心がけています。

講義はスライドと板書を使って説明を行い、最後の10～15分程度で小テストを行う形式にしています。小テストは資料を見ながら書いてよいもので、これに多くの学生が正しく解答できていない場合には、私の説明がよくなかった部分だと認識します。そして、この小テストの余白に質問やコメントを自由に書くよう促しており、実際に学生たちは毎回かなり多くの質問やコメントをくれます。これは非常に重要なフィードバックなので、私は次の講義の冒頭ですべての質問・コメントに対する私なりの回答を紹介します。これによって、講義中によく理解できなかった点を補足することができます。同時に、高校生物学を履修した学生からは高度な質問が出ることも多く、それに答えることで彼らにとって単なる復習ではなく少しでも新しい学びがあるようになると考えています。

成績評価については、その基準を明確にして情報を開示することが重要だと考えています。私は初回の講義で、生物学における成績評価の基準と私の講義における得点の計算の仕方を明確に説明します。そして、試験を行う際には、事前に過去問を公開し、希望者には答案を返却し、得点を開示し、採点基準を述べ、全体の得点分布等のデータもできる限り示すようにします。これによって、学生たちにとって納得感のある成績評価になるものと考えています。

③ その他

私の講義では、学生たちに質問・コメントしてもらうことを重視しています。しかし、多くの学生は質問することに慣れておらず、そこをいかに乗り越えてもらうかが重要です。そのために、私はどんな質問でも（生物学に関係ない質問でも）肯定的にとらえて、なるべく丁寧に回答することを心がけています。質問できること自体が素晴らしいことだと気づいてもらい、多くの質問をいただくことで双方向的な講義にしていくように努力します。そしてそのやりとりの中で私は講義のやり方を改善し、学生は生物学の身近さ・面白さを感じてもらえるのではないかと考えています。

■学生の自由意見（良かったと思う点）

- ・高校で生物を履修していなかったですが、分かりやすく説明して下さり面白いと感じられました。分からないところは質問コーナーで何度も説明して下さりありがたかったです。前期に履修した講義の中で最も知的に刺激される講義でした。
- ・生徒の質問に対して真摯に対応してくれる点
- ・生物学の本質に触れていた点。
- ・紙に疑問点をかいて答えてくれるので、気軽に質問できる環境が良かった。

- ・毎回の授業で質問を募集し、次の授業で詳しく解説していただいたこと。
- ・質問した内容に毎回丁寧に回答してくださっていて、知的好奇心がとても刺激された。
- ・講義の初めに質疑応答が設けられることで、講義中に生じた疑問の解消が生徒にとって気軽かつ容易になっていた。
- ・質問にとっても詳しく答えてくださったところ。
- ・スライドに情報がしっかりとまとまっていたため、授業が受けやすく、復習もしやすかった。板書を左右どちらの黒板にも書いてくれていたので見やすかった。